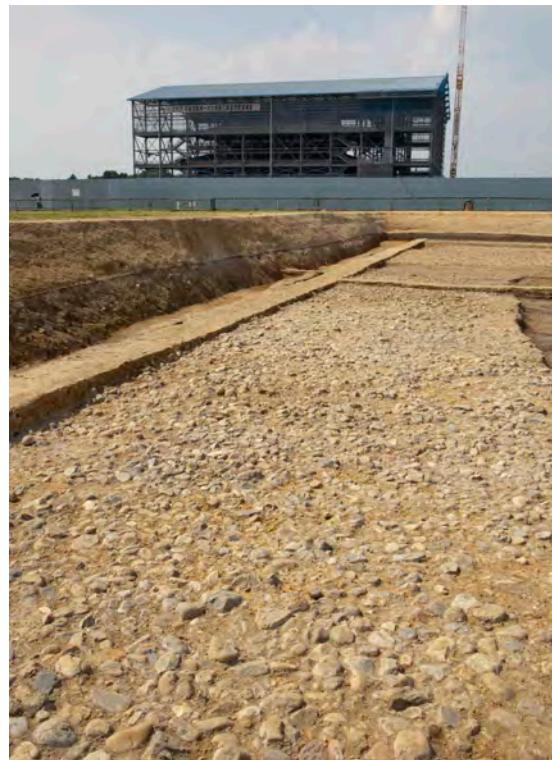
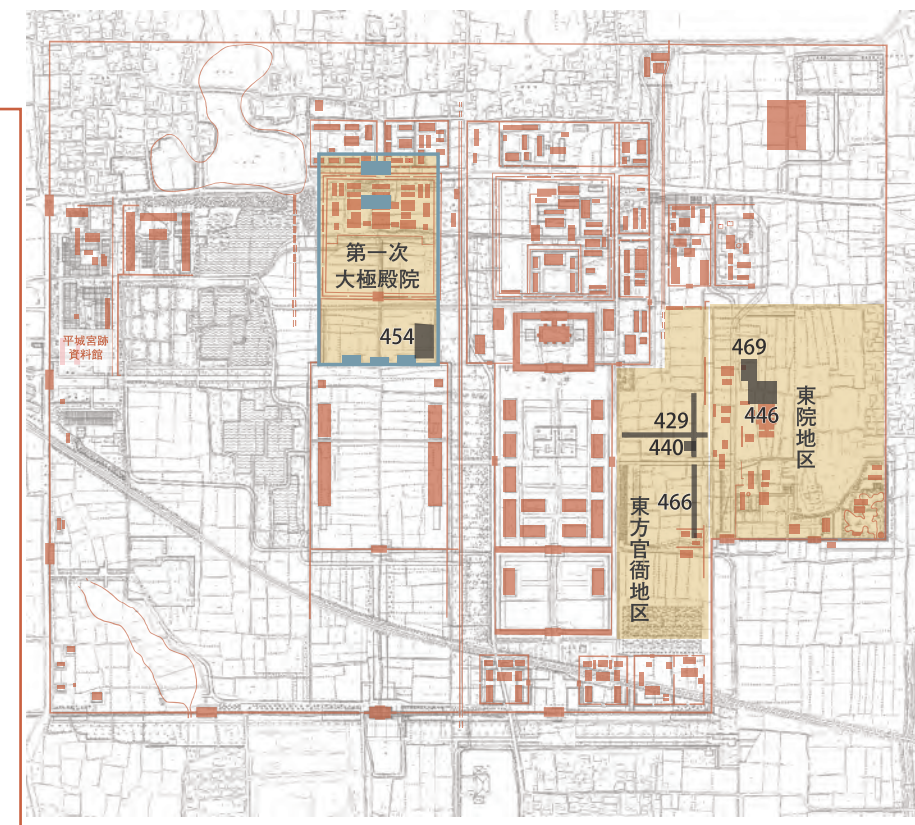


平城宮の調査

奈良文化財研究所では、1965(昭和40)年より50年以上にわたり平城宮跡の発掘調査をおこなっています。中期・長期計画にもとづき、エリアを決めて重点的に調査しています。



▲広場の石敷(南から)

第一次大極殿院広場 454次 2009.4.13～7.15

第一次大極殿をとりかこむ区域(第一次大極殿院)南半に広がる広場の調査。調査区は大極殿院の東南隅部に位置し、奈良時代前半の3時期にわたる石敷の変遷と、大極殿院内の排水を担った東西溝を確認しました。また調査区中央部では、浅くて大きな方形の土坑(穴)を検出しました。

▼調査区全景(西から)



屈って見つけたモノと

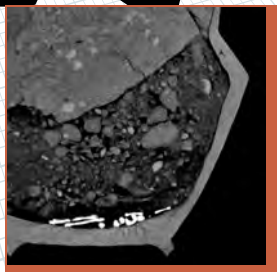
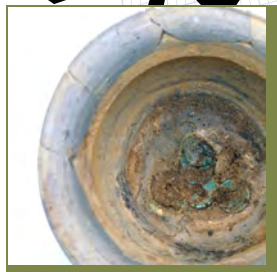
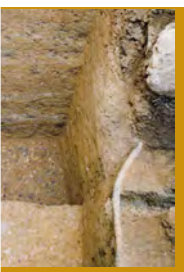
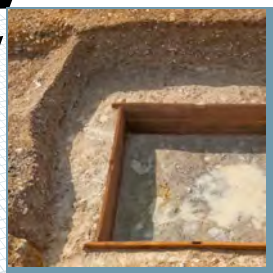
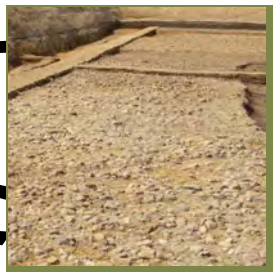
解ったこと

平城宮の調査

- 第一次大極殿院広場
- 東院地区
- 東方官衙地区

平城京の調査

- 興福寺南大門
- 興福寺旧境内
- 薬師寺境内
- 海龍王寺旧境内
- 春日東塔院
- 平城京右京三条一坊八坪



発掘速報展 平城 2009・2010

とき：2011.2/19(土) → 5/8(日)

9:30～16:30 月曜休館
月曜が祝日の場合は火曜休館

ところ：平城宮跡資料館 企画展示室

ギャラリートーク：会期中、毎週金曜 14:30～

主催 / 独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所

後援 / 文化庁・奈良県教育委員会・奈良市教育委員会
近畿日本鉄道株式会社・奈良交通株式会社

問合せ / 奈良文化財研究所 連携推進課 TEL:0742-30-6752



第 446 次調査で検出した井戸 (東から) ▶

とうほうかんが
東方官衙地区

466 次 2010.1.18 ~ 4.23

東方官衙地区は、第二次大極殿・東区朝堂院・朝集殿院と東院にはさまれた場所で、役所(官衙)があったと想定しています。今回は、地区の中央部東端を調査し、東西方向の礎石

建物が1棟ごとに築地塀をはさんで、南北に3列建ち並んでいるようすを確認しました。また建物の下層の整地土からは、木簡を含む木製品が出土しました。



446次 2009.10.1~2010.3.31 東院地区西北部の調査。東院中枢部に通じる幅15mの東西道路と、6時期におよぶ建物の柱穴を多数検出しました。また井戸枠の残る古代の井戸が宮内で久々に出土しました。

とういん
東院地区

平城宮には、東側に張り出し部があり、その南部分を「東院地区」と呼んでいます。東院地区には、奈良時代を通して皇太子や天皇の宮殿がおかれ、儀式や宴会に利用されていたことが知られています。

◀ 第 446 次調査全景 (東から)

▼ 第 469 次調査全景 (東から)



469次 2010.4.1 ~ 10.29 第 446 次調査の北側。調査区中央の塀と溝をさかいに南北で区画の性格が異なり、南半は大規模な建物群が、北半は小さい建物が見つかり、食器や須恵器の甕がたくさん出土しました。



▲ 'うんち' 土坑の検出状況 (北東から)

東方官衙のうんち 440 次

2年前の調査で、6基の土坑(穴)がまとめて発見されました。中の土を調べてみると、'うんち'や糞木(おしりをぬぐうヘラ)のほか、寄生虫の種類などもわかりました。'うんち'を溜めた穴の跡と考えられます。平城宮内で'うんち'が確認されたのは、はじめてです。



▲ [無・有鉤虫卵] 生肉を食べると感染する寄生虫

◀ 調査区全景 (南東から)

とうほうかんが
東方官衙の木簡

429 次・440 次・466 次



ひ おうぎ
東方官衙の檜扇 ※背景写真

440 次の木簡を大量に含む土坑(穴)から出土した檜扇。糸の痕跡から、綴じ方を復原することができました。

豊嶋郡の長官、大伴官足の書(文書か)に付けられていた付札。この官足は、『続日本紀』によると、鎮所のちの多賀城に私殺を献上したことが評価され、昇進した人物です。豊嶋郡は武蔵国(現在の東京都北区付近)。

九九の木簡 古代の九九は九九八十一からはじまって八九七十二と続き、だんだんと数字が減っていきます。「如」は語調を整えるためのもので、中国の算書にも記載があり、九九が中国伝来のものであることを示しています。

天皇が崩御したことを記す木簡 同じ遺構からは宝亀年間七七〇(七八二)の木簡が多く出土しており、称徳天皇を指すとみられます。

表 天皇崩給
裏 年八月

表 九廿七 二九十八 一九如九
裏 五八冊 四八冊二 三八廿

長さ(163)mm・幅(15)mm・厚さ(2)mm

081 形式 縮尺3/4

429 次

長さ(63)mm・幅(13)mm・厚さ(2)mm

081 形式 原寸大

440 次

豊嶋郡大領大伴直官足書

長さ96mm・幅18mm・厚さ6mm

032 形式 原寸大

166 次



▲調査区全景(北西から)

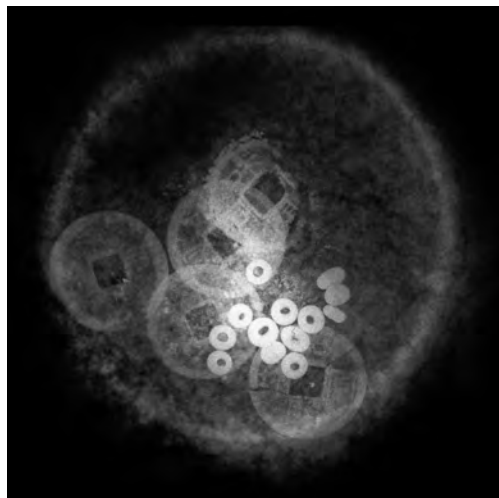


▲南大門の基壇版築層(南から)

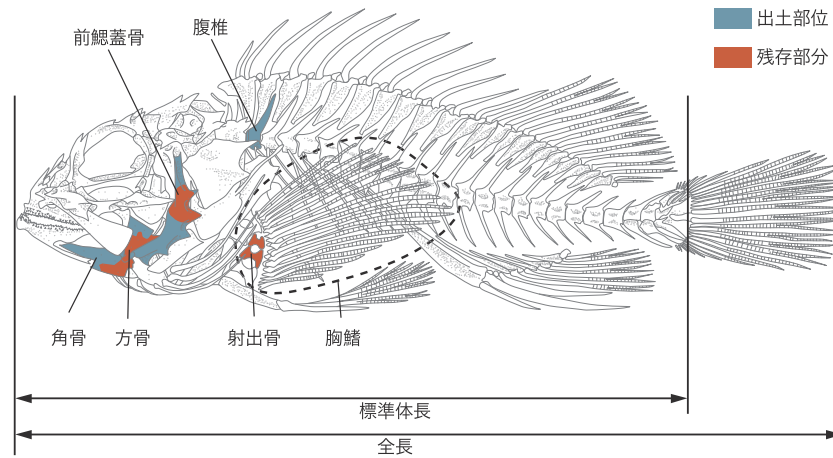
基壇は東および西北部が近代に削られていましたが、柱の礎石やその抜取穴を見つけ、創建期の門の規模(東西23.4m、南北9m)がわかりました。また金剛力士像の台座の基礎を発見しました。基壇の断面をみると、大規模な整地作業で谷を埋めてから掘込地業をおこない、ていねいに版築したことがうかがえます。



▲鎮壇具出土状況(北西から)



▲鎮壇具X線透過写真



▲出土したフサカサゴ科魚類の骨格部位

基壇の中央部で見つかった土坑(穴)から、鎮壇具が発見されました。須恵器の壺の中には、絹織物・和同開珎・ガラス小玉のほかに魚の頭部の骨やひれが入っていました。魚骨の形からフサカサゴ科(カサゴ・メバル類)であることがわかりました。

平城京の調査

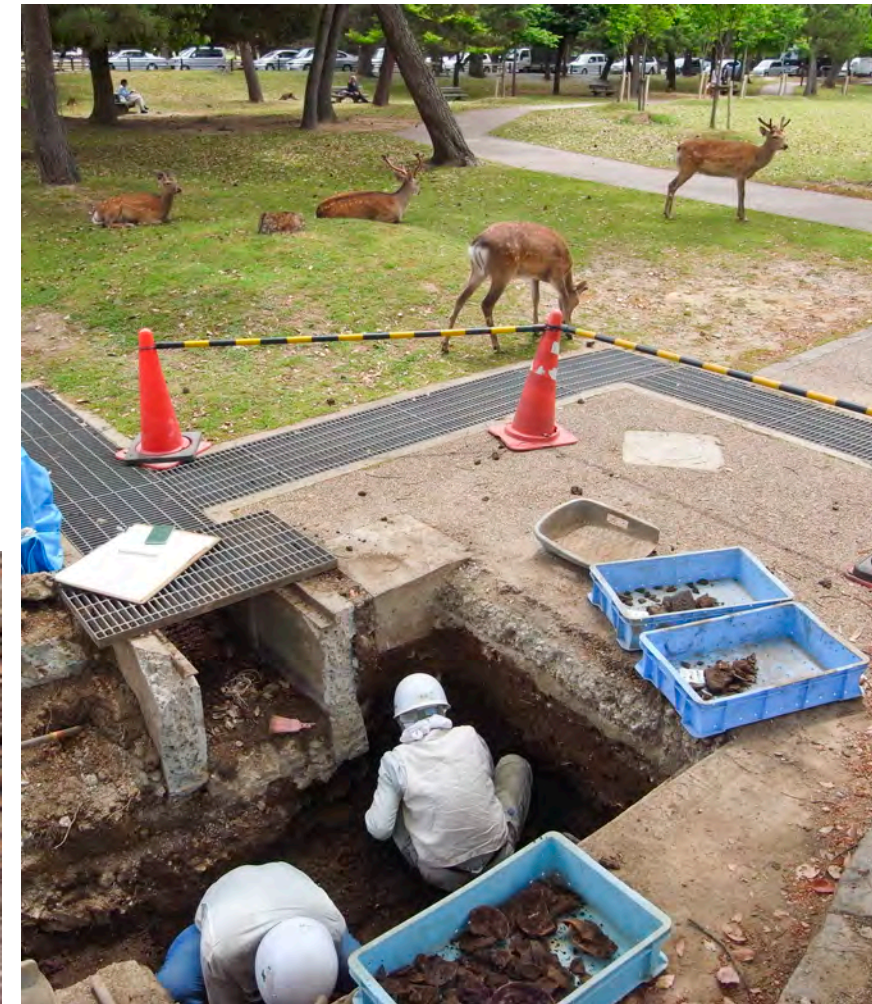
こうふくじ
興福寺旧境内

2009-7次 2009.5.12 ~ 5.15

奈良県庁前、登大路地下道の西出口付近の調査。土器や瓦を大量に含む土層を見つけました。小規模な範囲(1.8m²)の調査ながら、出土した土器はコンテナ90箱に達します。また築地塀の跡と、塀にともなう雨落溝を検出しました。



▲土器出土状況(北から)



▲調査風景(北東から)

かいりゅうおうじ
海龍王寺旧境内 456次 2009.5.11 ~ 5.18

飛鳥時代(7世紀)の軒瓦が見つかり、奈良時代よりも前に海龍王寺の前身施設があったことがいっそう裏付けられました。また法華寺前身建物や阿弥陀浄土院の瓦も出土しており、海龍王寺が法華寺の造営と一体となって改修された可能性があります。



出土した飛鳥時代の瓦▲

調査区全景(北東から)▶

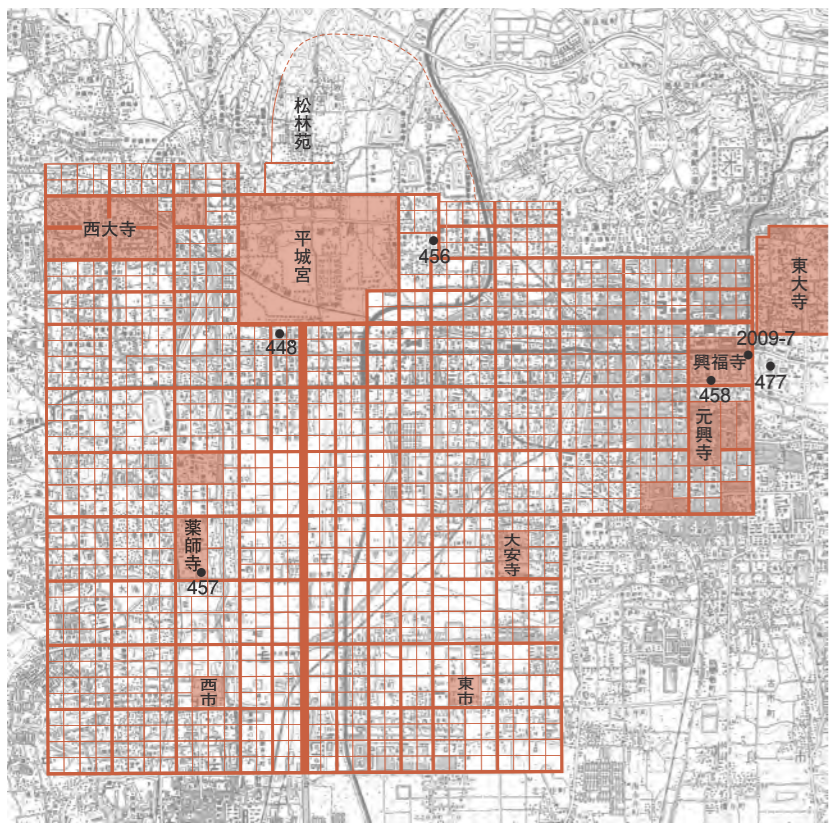
平城京の調査

平城京の区域は、整備事業や現状変更、開発にともない随時発掘調査をしています。また研究のために学術調査をおこなうこともあります。

薬師寺境内

457次 2009.6.25 ~ 11.19

現在の東院堂を囲むように細長い調査区を設けました。北・東辺で掘込地業をほどこした版築の基壇を確認しました。北辺3ヶ所で確認した礎石の据付穴の位置関係から、奈良時代の東院の中心建物は南向き(現在は西向き)であったことがわかりました。また西北部で東院の西辺を区画する掘立柱塀を、南端部で近世の池のあとを見つけました。



▼基壇南辺の地覆石(南から)



▲東側の調査区全景(北から) 建物の基壇、版築のようす(西から)▶



◀下層遺構(西から)

▼調査区全景(北東から)



春日東塔院

477次 2010.11.15 ~ 12.27
奈良国立博物館内にある、かつて春日大社の東塔のあった敷地の調査。区画施設にともなう雨落溝のコーナー部分を検出し、東塔院の東北隅を確定することができました。また、下層で11世紀末~12世紀初頭の土器が出土し、この辺りが東塔が建てられる以前から開発されていたこともわかりました。

右京三条一坊八坪

448次
2009.1.6 ~ 3.23

平城遷都 1300 年祭のための「平城京歴史館」建設の事前調査。調査区中央部には近代の池が広がっており、昭和初期から戦後にかけての当地の移りかわりを示す遺物を確認しました。奈良時代の遺構面はわずかに残るだけでしたが、基壇建物の痕跡を見つけました。

▶調査区全景(西から)



この展示は、奈良文化財研究所が、2009 年度および 2010 年度に平城宮跡および平城京跡でおこなった発掘調査の成果の一部を紹介したものです。2009年度の成果の詳細は、『奈良文化財研究所紀要2010』に報告しています。発掘調査速報は、『奈文研ニュース』(年4回刊行)でも随時掲載しています。あわせてご覧ください。